

2019年11月6日(水)

老球の細道509号

## 日はまた昇る、昨日と同じ日はない

会津バスケットボール協会 室井 富仁

小説『日はまた昇る』は1926年に発表されたヘミングウェイの初の長編であり、出世作でもある。私は『老人と海』が大好きであるが、ある評論家によると、この作品がヘミングウェイ最高の作品だそうだ。この小説の題名である「日はまた昇る」とは復活をかけるという意味だと思っていたが、変わらぬ生活に対するやるせなさを表しているという。

先週末、あいづ体育館で行われたバスケットボールB2リーグ第8節「福島ファイヤーボンズ対熊本ヴォルターズ」の2日間連続のゲームで面白い現象が見られた。土曜日の1試合目は福島が奇跡的なアウトサイドシュートの確率とディフェンスの激しさと熊本に96対66で30点差をつけて圧勝した。翌日の2試合目は、熊本の主力センターが前日のテクニカルファール退場失格によりゲームエントリーができない状態で、明らかに戦力ダウンで再び大差で福島の楽勝かと思われた。

ところがどっこい、メンバーが少なくなった熊本はゲーム前から集中した雰囲気はみなぎり、1Q開始早々から好調な攻撃を見せた。前日福島に徹底的にマークされたエースガードが、170cmの小兵ながら素晴らしい得点力とアシストを発揮した。福島は前日の圧勝に油断があったのか、前日とは「別人28号」に変身し、80対94で敗戦。会津開催での2連勝はならなかった。

この二日間のゲームを観戦して、さすがプロバスケットボールだと感心した。特に熊本は大敗後、宿舎へ帰ってからのゲーム反省、分析、そして課題と修正の作業をどれほど行ったのだろうか。プロは勝つことが使命であり仕事である。いつまでも過去を引きずっているわけにはいかない。日はまた昇る、しかし前日と同じ日にはしてはいけない。

チーム、選手は1日で変わるのである。そのためにはゲーム結果を分析、反省して、自分たちの特徴を出すには何を修正すべきか、相手の特徴を消すには何を課題にすべきかを十分に検討する。その作業においてはヘッドコーチは眠れない夜を過ごすこともある。

ミニ、中学、高校生の試合を観戦すると、いつも同じチームが勝ち、いつも同じチームが負ける。ヘミングウェイの「変わらぬ勝敗に対するやるせなさ」の『日はまた昇る』ではなくて、同じ日の繰り返しはない復活をかける『日は昇る』を目指してほしい。

会津地区では数少ないプロバスケットボールの開催だったが、まだまだ多くのバスケットボール関係者が観戦している状態ではなかった。2日間ゲームを観戦した人たちは、バスケットボールのゲームは戦略、戦術、スカウティング、選手起用などによって、1日でまるで別人28号のチームと化してしまうことを学んだことだろう。1回くらい負けてもがっかりすることはない。日はまた昇る、昨日と同じ日は2度とないのである。

最後に蛇足であるが、プロのゲームは審判へのアピール、クレームが多い。相手チームと戦う前に審判と試合をしているような場面も見受けられる。夏は暑い、冬は寒い、蚊に刺されれば痒い、そして、審判は間違えることもある。あたりまえのことを気にしてもどうしようもない。ゲームに集中するのみ。人間の脳は一度に二つのことはできないと言われる。審判への意識を自チームの修正、相手チームのスカウティングに向ければ、また違ったゲーム展開になるだろう。甘チュアの発想かもしれないが……。